

第2節 神木坂3号墳と新羅土器

大きく攪乱された神木坂3号墳の横穴式石室内から新羅土器の小片が出土したことは、すでに第4章第3節で触れた。また、この土器についても詳述しているが、本節で若干のまとめをしておきたい。

朝鮮半島では、器壁の外面にスタンプ文を施す土器群を統一新羅様式と呼んでおり、7世紀の初頭には成立する土器様式と考えられている。慶州を中心に古墳墓、宮都・寺院関係の遺跡から多数出土している。

日本でも朝鮮半島で出土しているような新羅土器^{註1)}(統一新羅系土器)は、これまでに44遺跡、約60点が知られており、今後もこれらの数は増加していくものと思われる。これらの分布状況は対馬を含む北部九州、畿内で比較的まとまって出土しており、この他、関東でも数点確認されている^{註2)}(図56)。以下、主な出土地の概略に触れておきたい。

対馬では、下ガヤノキ遺跡をはじめ、墳墓関係遺跡から台付長頸壺、広口壺などが出土しており、6世紀末から7世紀後半の時期が考えられている。北部九州では福岡市吉武塚原古墳群、宗像市相原古墳群、大野城市王城山C古墳群など数基の古墳から壺、蓋形土器などが出土しており、6世紀後半から7世紀後半の遺物と共伴している。また、太宰府では7世紀後半の整地層から新羅土器と考えられる破片が出土している。この北部九州では、伝世品も含めて古墳出土例が比較的多く知られている。

九州に次いで畿内でも多くの出土例が確認されているが、なかでも大和南部の飛鳥地域の宮都・寺院関係遺跡からの出土が多い。現在までに石神遺跡、豊浦寺跡、橘寺跡、大官大寺跡、西橘遺跡から台付長頸壺、緑釉壺などの出土が知られており、小墾田宮推定地、藤原宮跡でも確認されている。また、平城京跡・平城宮跡からも数点出土している。大和では神木坂3号墳例を除けばほとんどが宮都または寺院関係の遺跡からの出土であり、北部九州とは異なった様相を呈しているといえる。これらの他、京都では、大覚寺3号墳から7世紀初頭の台付長頸壺、大阪では金属加工関係の遺跡である太井遺跡から7世紀中頃の有蓋椀が出土している。

関東では千葉、栃木の遺跡で数点出土しており、これらが現在の東限となっている。千葉県野々間古墳では台付長頸壺と蓋形土器がセットで出土しており、7世紀代の年代が考えられている。

神木坂3号墳の資料は小片のため器形、法量等は明らかでない。外面には2条の浅い凹線がめぐり、この上には列点文をまわりに配する水滴文状の流線形文、下には中心に点をもつ点半円文(二重半円文)と流線形文を縦方向に連続させたスタンプ文を施している。現状での基本的な文様は流線形文と点半円文で構成されている。

日本で確認されている新羅土器のうち、この種の流線形文を施しているものは、豊浦寺跡出土の緑釉壺、相原古墳群(2号墳)出土の壺にその類例を求めることができる。前者は8世紀から10世

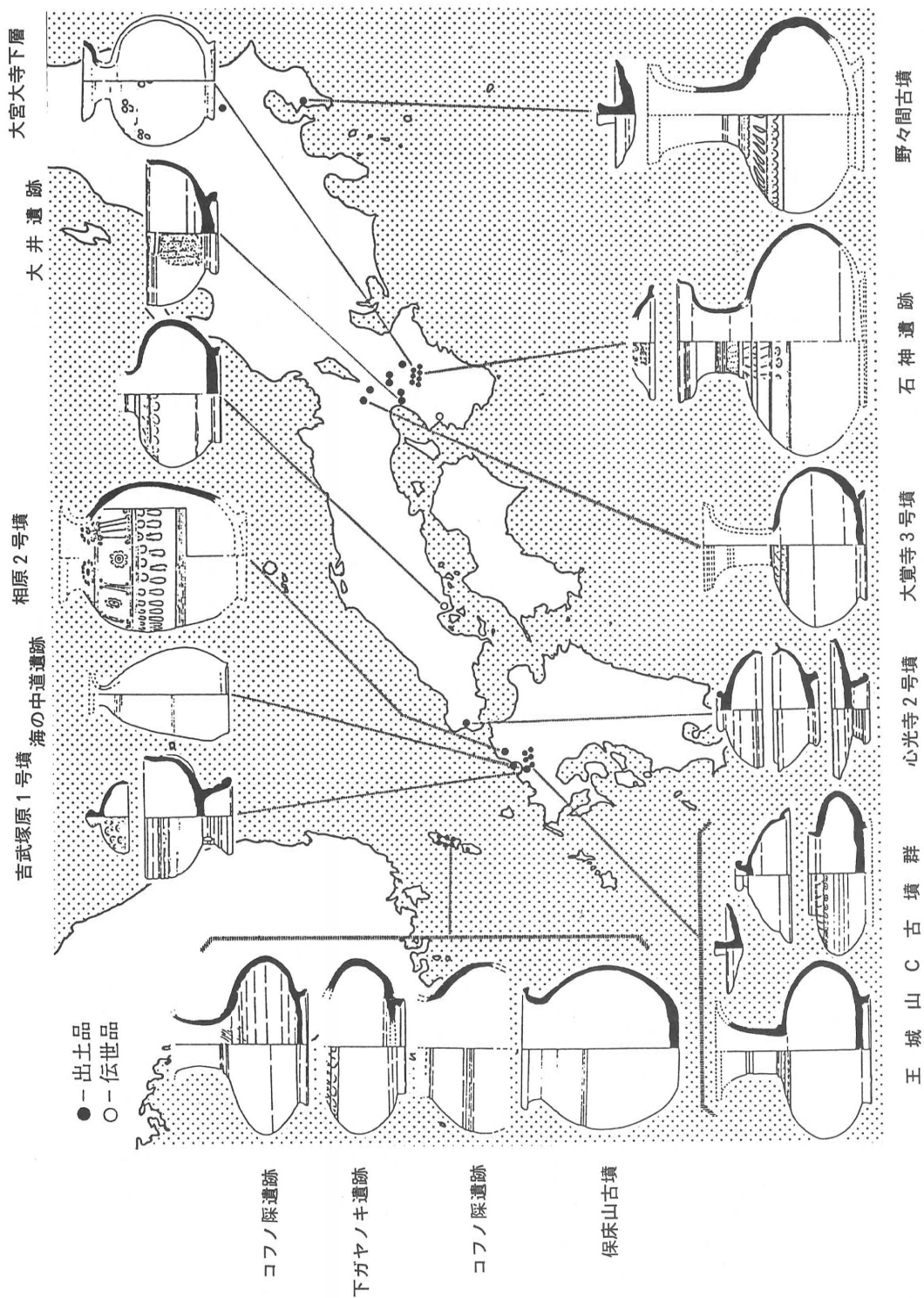


図56 日本出土の新羅土器分布図

紀の遺物と共伴しているが、7世紀代の年代が考えられている。後者は横穴式石室の墓道部分からの出土で、7世紀初頭の遺物を伴っている。また、流線形文の周辺に列点文を施さない流線形文のみの文様は、福岡王城山古墳群（16号墳）、対馬下ガヤノキ遺跡、大阪国府遺跡、千葉野々間古墳などの出土資料に認められ、ほとんどが7世紀代のものである。なお、流線形文は台付広口壺、台付長頸壺に施文が認められることから、神木坂3号墳例の場合、この種の器形の可能性がある。

もうひとつの文様である点半円文（二重半円文）は、慶州忠孝里6号墳出土の台付碗にその類例を求めることができる。この種の碗は文様、器形等から型式学的に系統だった変遷が示されており、忠孝里6号墳例は6世紀末～7世紀前半の比較的古い時期に位置付けられている。

流線形文が列点文を配するものから配さないものへと、点半円文が二重から一重へとそれぞれの文様が形骸化していくものとすれば、神木坂3号墳例は丁寧な文様を施していることから、比較的古い時期に位置付けることが可能となってくる。先述の相原2号墳例や忠孝里6号墳例を参考に神木坂3号墳例の年代を考えるなら、7世紀前半頃に比定できる。

古墳出土の新羅土器は北部九州、山口心光寺1号墳、京都大覚寺3号墳、千葉野々間古墳などのものが知られている。この土器をもって古墳の被葬者は渡来人と断定することはできないが、直接、間接のいずれかに渡来人が関わっていた可能性が考えられる。当時、大和の宮都や寺院には多くの大陸文化がもたらされたのは明らかであり、新羅土器もその傍証といえる。宇陀地方において、直接、大陸文化が流入した事実は明らかでないが、渡来系人が関わった磚積石室の分布が注目される。この地方に産する榛原石の切り出し、加工等に渡来系の工人が携わったと推定されている。

古くから宇陀は大和と伊賀、伊勢、東国へと通じる主要道の要衝であり、この地の掌握は軍事上も大変重要となってくる。3号墳の被葬者は中央の影響のもと、この地を掌握した人物であろうか。この古墳の被葬者は飛鳥を経て、新羅土器を手中にしたと考えられるが、渡来人によって直接、当地へもたらされた可能性も否定できない。

神木坂3号墳は、7世紀前半頃の新羅土器が出土するものの、石室の構造、その他の遺物から神木坂2号墳と同時期の7世紀第2四半期の築造と考えられる。また、2号墳よりやや遅れる中頃に近い時期とも推定されるが、詳細は明らかにできない。

この2基の古墳は在地的な系譜を辿れる丹切古墳群とは異なり、7世紀代にこれまで古墳が少なかった地域に突如として出現する。また、神木坂1号墳とは約1世紀もの時期差があり、ある程度の断絶が認められる。神木坂2・3号墳の被葬者は、当地とは直接の系譜を辿らない飛鳥から派遣された人物とも推定できる。いずれにせよ、この2基の古墳の被葬者は何らかの形で大陸文化に関わっていた人物であろう。

註

- 1) 田辺昭三氏は山口心光寺1号墳例のように舶載品の存在を認めつつ、福岡王城山C5号墳の出土資料から、朝鮮半島から渡来した陶工が周辺地域で製作を行ったと考えられている。(田辺昭三 『須恵器大成』 角川書店 1981)
- 2) 江浦 洋「日本出土の統一新羅系土器とその諸問題1」『太井遺跡(その2)一調査の概要一』(財)大阪文化財センター 1987
江浦 洋「日本出土の統一新羅系土器とその諸問題2」韓式系土器研究会発表資料 1988
に負うところが大きい。江浦 洋氏には、種々のご教示をいただいた。

参考文献

- 『慶州忠孝里古墳調査報告書』 昭和7年度古墳調査報告第2冊 朝鮮総督府 1937
- 『蔚州華山里古墳群』 釜山大學校博物館遺蹟調査報告第6輯 釜山大學校博物館 1983
- 金 元龍「統一新羅土器」『韓国史論』15 国史編纂委員会 1985
- 韓 炳三「統一新羅の土器」『世界陶磁全集』17 小学館 1979
- 小田富士雄「対馬・北部九州の新羅系陶質土器」『古文化談叢』第5集 九州古文化研究会 1978
- 清家 博「下ガヤノキ遺跡発見の新羅土器の新資料」『九州考古学』№51 九州考古学会 1976
- 二宮忠司ほか『古武・塚原古墳群』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第54集 1980
- 酒井仁夫『相原古墳群』 宗像町文化財調査報告書第1集 宗像町教育委員会 1979
- 酒井仁夫ほか『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』IX 福岡県教育委員会 1977
- 石松好雄ほか「太宰府史跡」『昭和53年度発掘調査概報』 九州歴史資料館 1979
- 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』6 奈良国立文化財研究所 1976
- 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』15 奈良国立文化財研究所 1985
- 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』16 奈良国立文化財研究所 1986
- 土橋理子「奈良県出土の輸入陶磁器について」『考古学論攷』第7冊 奈良県立橿原考古学研究所 1982
- 安藤信策「大覚寺古墳群発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概要』 京都府教育委員会 1976
- 江浦 洋『太井遺跡(その2)一調査の概要一』 (財)大阪文化財センター 1987
- 石井則孝「千葉県富津市出土の新羅焼土器」『史館』第8号 1977